

留学生にとって日本文化とは何か

留学生センター 大 嶋 眞 紀

1. はじめに

日本事情とは何を教える科目であるかということについて様々な議論がある。日本語教育の一部であるのかないのか、学習者を主体とする手法の流れ、異文化間教育との兼ね合いなどどれも複雑な背景を抱えている。筆者自身、大学内では「日本事情を教えています」と言い、大学外では「日本文化とか日本人のものの考え方とかを教えています」などと言葉を濁してきた。そろそろ何らかの整理をしたいと考え、この問題を留学生自身に投げかける手法で探してみた。本稿は平成13年後期に行った日本事情の授業報告である。得られた結果はもとより、留学生自身の視点を紹介したいと考え、本稿を執筆した次第である。^(注1)

クラスの構成は中国13、台湾1、韓国4、オーストラリア2、マレーシア2、ベトナム、スイス、インド各1、合計25人の学部1年生のクラスで、日本語能力は一級合格者を半数以上含む上級者のみである。15週で2単位取得できる正規科目で、このテーマに費やした時間は約5週。1回90分の授業のうち、30分～60分を使い、残りの時間は日本人とどのようにコミュニケーションをとるかなどについての練習、読解、失敗事例の分析などを行った。通常、学期前半と後半で異なるテーマをとりあげ、5～7週で1ラウンド終える形をとっている。今回のテーマ「留学生にとって日本文化とは何か」は前半のものである。全体のあらましは以下の通り。

	タイトル	形 態
1 週目	文化とは何か	ブレイン・ストーミング／講義／質疑応答
2 週目	文化が違うとは？ a. 所属集団について	講 義 ペア・ワーク／口頭発表
3 週目	b. 価値観のちがいについて	アンケート調査／講義
4 週目	留学生の目で見た日本文化について	グループ討論／口頭発表／クラス討論
5 週目		グループによる分類作業／まとめの講義

2. 文化とは？

文化とは何か。

留学生にたずねてみた。「言葉とか習慣」「ものの考え方」「生きること」「いろいろなことのまとめ」「一言ではいえないくらい広い範囲の事柄」。

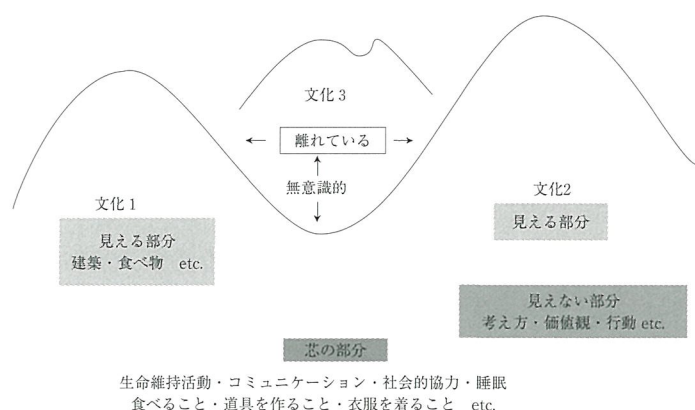
どの答えもううん、そうだねと言いたくなる。「生きること」なんて答えにはみんなもびっくり。そう言ったのはオーストラリアからの交換留学生だ。日本事情のクラスはここから始まる。留学生は一通り、日本語を学び、日本人学生と一緒に普通の科目、政治学や物理学などを受講できる日本語能力を持っている。いわゆる学部留学生を対象としたクラスだが、大学院生や研究生も日本語能力がある程度、高ければ受講を認められる。いわば総仕上げのクラスだ。文化とは何か、日本文化

とは何かということについて、一定の時間をかけてみんなで考えていく。学習の過程では日本語を話すこと、書くこと、資料の講読やアンケート調査、討論なども行い、日本語にも磨きをかける。最終的には何らかの結論を出し、それ以降の学習の基盤にする。

たとえ上級レベルといえど、日本語能力の鍛錬や日本文化の理解に終わりはない。このクラスは次なるステップへ向けての仕切り直しでもある。これからは日本語について、日本文化について、自分自身で学んでいかなければならない。そしてまた、せっかくここまで到達した日本についての理解力をぜひ維持し、興味を持続させていってほしい。そんな願いをこめて日本事情の授業を組み立てている。

文化とは何か。世界中の学者がさまざまな定義を下してきた。「文明化の歴史としての文化」「人類学的・社会的に見た文化」などという言い方や、表の文化と生活文化などというのものもある。もっとむずかしく行動主義・機能主義的定義を行ったり、認知主義・象徴主義的定義を行うものもある。何しろ定義だけでもいくつあるか知れず、学者の数だけあるのかもしれない。そんな話をして最後にとりあえずこんなのはどうかと、比較的わかりやすい「文化の島」という考え方を示す。カーターという人の唱える説だ。留学生は島のイメージを頭の隅に置くことになる。^(注2)

文化の島



©Carter, J.: The Island Model of Intercultural Communication 1997

さらに解説を加える。ただし解説といっても、質疑応答を中心とする。上の図で「見える部分」にはほかにどんなものがあるか。「見えない部分」はどうかなどについて検討を加える。

たとえば「見える文化」について。テキストには次のように書いてある。^(注3)

朝起きてから夜寝るまで、寝ている間も私たちは文化のお世話になっている。朝どのような寝具から起きだすのか。洗面はどのような場所で何を使って済ませるのか。誰にどのように朝の挨拶をすませるのか。朝食は誰とどこで食べるのか。

こんな短いパラグラフでもさっそく手があがる。「日本人はどんな寝具を使っているのですか」タオルケット、毛布、布団。黒板に図示する。すると「ええっ」と驚きの声があがる。中国では布団の上に毛布。オーストラリアではシートで毛布を包んで、それを上からかける。それだけ。韓国も

オンドルがあるから、そんなにかけない。インドでは布団だけ。シーツは使わないの? とオーストラリア人が声をかける。たかだか寝具だけでも話はこんなにはずむ。洗面、挨拶も同様。

こうした一見ばらばらな体験談もそれぞれの文化の脈絡の中ではある程度説明がつくということを確認し、「見える文化」の多様性を知った上で、「見えない文化」の話へと進む。こちらは価値観や宗教観、道徳、暗黙の了解事項など、文字通り一つ一つ掘り起こしていかなければ探りきれない事柄をたくさん含んでいる。しかしまだこの段階では通りいっぺんの把握にとどめておく。例えば、日本では七五三は神社に行く、結婚式は神前または教会で、そして葬式はお寺でやるのが一般的などという現象をとりあげる。留学生の反応は様々だ。日本人は宗教を知らない、宗教心がない、不謹慎だなどというものから、日本人は何でも外国の文化を取り入れるのが好きだ、大昔は漢字と仏教。今は各国料理、アメリカ文化。そして洋風結婚式。楽しんでるんだから罪はないなどというものもある。まだこの段階ではブレイン・ストーミングのレベルなので、善悪の議論やなぜそうするかという動機、心理的側面などには触れない。

さらに言葉はどうか。上のカーターの図では「芯」の部分にコミュニケーションとあるけれど、それぞれの言語はそれぞれの文化の島に属するのではないかなどという意見も出る。コミュニケーションというのは非言語的なものも含むから「芯」の部分に属するのだという意見。では言語というのは見えるのか、見えないのかなどという議論も沸き起こる。答えは必ずしもない。なくてもかわまないのだ。言葉というのはものをさし示すものだ、だから見えない文化だという意見も出る。けれども言葉は価値観などの目に見えないものもさし示すのだから、価値観などと同じカテゴリーに入れることはできない。指すものと指されるものが同じカテゴリーではおかしいじゃないかという意見。じゃ、何だ。指し示すといっても仮のものだ。単なるシンボルで実体はないなどという議論がとびかう。

理系、文系の入り混じる、国籍も中国、韓国からマレーシア、ベトナム、タイ、インド、オーストラリア、年によってはロシアやアメリカ、ヨーロッパなどの留学生も混在するクラスでの「文化」をめぐる議論としてはこのあたりで十分だと筆者は考える。言語学や哲学の授業ではない。留学生が「文化」とは何か、「言葉」とは何かということについて、一時、心を沈めて考えてくれればいいのだ。

さらには異なる文化の島がどのように交錯するかというステップに進む。文化が違うということはどういうことか、異なる文化に抵抗を覚えるのはどういう時か、また、相手の文化をステレオタイプ視するとはどういうことか、などということについて一通り学習する段階だ。

3. 文化が違うとはどういうことか。

3-1 所属集団について

まずはじめに考えなければいけないことは、同じ文化圏の中にも異なる社会集団があるということだ。一つの文化圏の中にもさまざまな社会集団があり、それぞれが固有の文化を持っている。単純な例では若者文化、熟年文化などがある。また一人の人間の中にも複数の文化が存在する。例えば女性文化、熟年文化という風に、人間はたくさんの仕切りの合間で暮らしているといっても過言

ではない。そしてそれぞれの仕切りの中の価値観が、別の仕切りの中の価値観と対立する。自己の内面でもそうなのだから、外部、すなわち他人同士ではもっと対立は錯綜する。

ではこうした対立は解けないものなのだろうか。例えば社会と社会の間にある対立として集団主義的社会と個人主義的社会というのがよく話題になる。その対立点はどこまで絶対的なのだろうか。集団主義的といわれる日本人の中にも極めて個人主義的な価値観を抱いている人もいれば、個人主義的と言われるアメリカ人にも集団主義的価値観を持つ人も大勢いる。制服を着るとか着ないとか目に見えるレベルで集団主義的である場合もあれば、神を信ずるかどうかなどという目に見えないレベルで集団主義的な社会もたくさんある。講義はここまでにして作業にとりかかる。

異なる文化の間で、共有できるものは何か。何が共有できないか。違うものは何か。その違いは絶対的なものかなどという問いをより実践的に捉えるために、留学生二人ずつでペア・ワークを行った。作業手順は以下の通りだ。

まず紙に島を二つ、裾野を交差させて書く。^(注4)そして二人で話し合いながら、島が交差しない部分でそれぞれの学生がどのような文化を持っているかを書き込んでもらい、次に交差する部分に、二人が互いに共有する文化を書き込んでもらった。その結果の大略は次の通りである。また、この結果については、各ペアごとに口頭発表をしてもらった。その結果は次の図表の通りである。

留学生の使用した文化区分（留学生数 25名）

一般的分類・所属による分類	言語・趣味による分類	食生活・その他による分類
人間文化 男性・女性文化 子供文化 若者・熟年文化 既婚者・独身文化 理系・文系文化 専門別文化（医学・法学etc.） アジア文化 各国文化 国内地域文化（中国東北部・南部etc.） ～系文化（マレー系etc.） 鹿児島大学文化 留学生文化 日本事情文化	各国語文化 方言文化 漢字文化 パソコン文化 弓道文化 音楽文化 釣り文化 スポーツ文化 サッカー文化 映画文化	焼肉文化 香辛料文化 酒の文化 箸の文化（ナイフ/フォーク, 手） 台所文化 トイレ文化 握手の文化（手を合わせる・お辞儀） アルバイト文化 一人暮らし・国際交流会館文化 自転車文化 携帯文化 靴を脱ぐ文化

留学生の多くが言語や出身地域別文化圏を挙げる。またより大きなカテゴリーによる区分を挙げる学生もいる。例えば男性文化、既婚者文化などと自分を位置づける学生もいる。さらには趣味・嗜好による分類、食生活による分類などに着目する学生も多い。ユニークなのは、留学生文化などという視点、食生活で何を道具とするか、挨拶の仕方、近年の傾向を反映する携帯文化などというのもクラス全体の共感を得た。因みに挨拶の仕方による所属集団文化という観点では、お辞儀をする文化が相手に頭を差し出すという意味で本当に無防備なのかどうか、何かというと握手をする文化圏でも女性がその対象とはならないのはなぜか、挨拶で表すのは礼儀や敬意であるのか、親密さ

であるのかなどという議論が起こったのは興味深い点である。(注5)

3-2 価値観のちがいについて

次のステップとしては、価値観に焦点をあてた。文化をめぐる授業では「価値観」という言葉が頻発するが、では「価値観」とは何かと問うと、これもまた多種多様な回答が登場する。「価値観」というテーマは基本的に奥が深いということを確認したうえで、予備的な調査を行った。留学生に尋ねたのは以下の質問である。

質問：あなたが日本人と共有できると思う価値観はどんなことか。また、共有できないと思うことはどんなことか。

回答は以下の通りである。

共有できると思う価値観	共有できないと思う価値観
家族が一番大事 お金が一番大事 目上の人への尊敬心 東洋的心（3人） 愛 基本的なことを守る 嘘をつかない（2人） 労働は尊い 約束は守る 仕事や勉強を一生懸命やること（10人） 人に親切にすること 自分のためにがんばる 時間を守る 酒の上のつきあいを重視する	いろいろな宗教を持っている。一つの神様を信じていない（2人） 人生を楽しんでいない 歴史・戦争の見方（3人） 直接断らない スキンシップがない 日本人が一番えらいという考え方 上下関係の強さ 個人主義が少ない 性の氾濫 若者のファッション・ブランド志向（2人） 共産主義のためにがんばる 男尊女卑・男女差別（2人） 集団行動の重視：特に残業時 酔っ払いに許容的 異性への愛情がふまじめ 親類・友人間が冷たい

3-3 価値観をめぐる研究

上の表を見ても「価値観」の捉え方が多種多様であることがわかる。人生で何を重要と考えるか。それも大きな視点で捉えるか、部分的な視点で捉えるか。たとえば酒の上のつきあいを重視するなどという回答は、飲酒という限られたふるまいについての一般的な傾向をとりあげているわけで、この回答を「家族が大事」「愛」などという回答と並列させるのは問題であろう。また「神様を信じていない」「人生を楽しんでいない」などというのも日本人の生活上の傾向であり、必ずしも価値観とは言いがたい面がある。「共有できないと思う価値観」の部分にあげられた項目は「価値観」として記述するならば、たとえば「人生を楽しむべきだ」「人生とは楽しむべきものではない」などと書き換える必要があるのではないかなどという指摘を行い、「価値観」というものが歴史的にはどう捉えられてきたかをめぐって、文献や学説の紹介を行った。

とりあげた項目はクラックホーン・モデル（1960）、文化相対主義、日本文化論の流れと主要なキーワード、高コンテクスト文化などである。(注6) これらの中でも日本文化論のキーワードについ

ては、「タテ社会」や「ウチとソト」などといった用語は下手に強調しすぎると留学生が日本社会や日本人をステレオタイプ視する結果を招く恐れがあることはすでに指摘されており、また留学生自身からも母国であまりに多くの日本文化論に晒され、むしろその弊害を嘆く声もあったことから、授業では駆け足で通り抜けた。^(注7)

4. 留学生の目で見た日本文化

以上のような予備的な学習を終え、いよいよ留学生の目で見た日本文化の全体像を捉える作業に入った。

日本文化というつまさきに頭に浮かべるのは、一般的には能や歌舞伎、茶道、華道、武道などといったイメージがある。しかしながらすでに述べたように、文化というものをより大きな視点で捉えると、これらのものは文化の中のごく一部であるにすぎない。留学生の接する場面で遭遇する文化とは何か。言い換えるならば、留学生の目で見た日本文化とは何か。どういう事柄がまず目に入ってきて、どういう事柄が自分たちの興味の対象となったり、あるいは場合によっては幻滅の対象となるか。文化というものを生活様式全般と捉えたとき、どんな要素が留学生として日本で生活していく際に必要不可欠のものであるか、何が障害となるか。どんな場面で留学生は躓くか。何が日本文化の魅力であるか。そういうものがあるか否かといった面まで含めて、留学生の視点を把握したいと考えた。

留学生を対象とした意識調査は各種行われているが、留学生が日本文化を総体としてどう捉えているかという調査はまだ行われているとはいえない。^(注8) また本論文では、いわゆる数値的な調査を行うことを目的とせず、あくまで留学生が何を考えているかを探るための質的なアプローチを行うこととした。そのために5週間の授業の中で適宜時間を割いて、留学生の目で見た日本文化の全貌を可能な限り、捉えたいと考えた。

作業手順としては、留学生の体験する場面を中心に、時間軸と空間軸の双方から文化の分類をどのように設定すべきか議論した。図書館風の分類、大学の構成に従った分類、「日本事情」関係の書籍に見られる分類などを、グループ討論、各グループからの発表、クラス全体の討論という段取りで検討し、さらに教師の側からも分類方法についての仮の案を何回か提案し、最終的には次に掲げる分類方法に意見が集約された。若干の異論は入国前に知った日本文化という項目を設けるべきかどうか、その先入観と実態との落差やステレオタイプの修正をどこに位置づけるべきかという議論があったが、それについては後述の通り、加筆修正している。

- A 入国してすぐ体験する文化
- B 入国してしばらくしてから体験する文化
- C 時間をおくにつれて体験する文化
- D 目に見えない文化
- E 外構えの文化
- F 史的文化

以上のほかに筆者は「G 日本文化論」という項目も設けたが、これは内外の学者が日本の文化をどう捉えてきたかという、いわば外からの文化把握で、留学生の体験する文化とは言いがたい側面があるので削除した。しかしながら日本の生活を長く体験したのちにこれらの文献も読んでみたいという意見は少ないながらあった。

上記の分類に基づき、それぞれの項目に何を含めるかについてアンケート調査を行い、またその結果について議論をし、修正を加えるなどして完成した結果は以下の通りである。

留学生の目で見た日本文化

A 入国してすぐ体験する文化
入国の日の第一印象（空港・人々・町の情景）；人との出会い（指導教官、チューター、日本人学生など）；寮の利用方法やルール；食生活；手続き（外国人登録・健康保険・銀行口座開設・入寮/アパート契約etc.）；キャンパス模様；研究室のルールや人間関係；授業登録等；地域の情報；カルチャーショックの克服
B 入国してしばらくしてから体験する文化
住宅事情（契約・住環境）；アルバイト体験；友だち作り；研究方法；コンパの体験（飲酒の習慣・支払い方法）；授業方法（講義の方法・教官との関係）；イベント体験；各種交流行事（文化・スポーツ）；サークル活動；ホームステイ体験（日本の家屋・家族関係）；ステレオタイプの修正
C 時間をおくにつれて体験する文化
日本の若者たち（子供・受験・いじめ・マンガ・ファッション・おたくetc.）；宗教生活；上下関係；人間関係；娯楽（スポーツ・料理・温泉etc.）；方言；治安；贈答の習慣；自然環境（環境問題・自然保護）；道徳（公衆道徳・男女関係・対高齢者etc.）；男女差別；家族関係；外国の影響（アメリカ文化の浸透・英語使用）；コンピュータの普及；異文化間葛藤の解決
D 目に見えない文化
挨拶と虚礼；曖昧な表現；集団行動；自己抑制的表現（含沈黙）；敬語；気づかい；本音と建前；ウチとソト；冗談のちがひ（含意など）；非言語表現
E 外構えの文化
政治；経済；外交；マスコミ；科学；技術；医療；教育制度；様々な事件（テロ・自然災害・歴史教科書問題etc.）
F 史的文化
歴史；伝統文化（茶道・華道・能・歌舞伎etc.）；武道；文芸；美術；建築；音楽；宗教（仏教・神道etc.）

（図表についての問題点及び考察）

- まず分類方法であるが、文化の分類としては決して正統的ではない。しかしごく普通の留学生の目に入ってくる順番で文化を捉えたという明らかな特徴をもっている。留学生によっては、自分の専門である科学技術が先という学生もいれば、趣味の茶道を優先したいとする学生もいたが、おおかたの議論でこのような順番となった。しかしこの順番でなければならないという絶対性はない。またグループ作業やクラス討論の過程で声の大きい、いわゆる自己主張の強い学生の意見が表に出てきやすいが、その場合もあとから紙片に書き込んでもらうなど補足的な作業を行い、おとなしい学生の声も拾うようにした。重要なのは結果以上に、こういう分類を採用するにいたったプロセスではないかと思われる。
- 分類された中身についても、果たして文化と呼べるかどうか疑わしいものも含まれている。特に最初の「入国してすぐ体験する文化」として、空港等の第一印象や最初の出会いに重点を置く

など、文化項目とは言いがたい面もあるが、第一印象がもっとも斬新であり、文化を感じさせたなどという意見が多く、省くことが困難であった。

3) カルチャーショックの克服、ステレオタイプの修正、異文化間葛藤の解決の三項目は直接的には日本文化と呼べないが、留学生が日本文化に直面する上で避けて通れない側面であり、「文化」を消化吸収していく上で重要な学習項目であるという主張が強かったため、取り入れた。この議論で次第に明らかになっていったのは、この作業が日本文化とは何かということより、自分たちが学びたいことは何かという点に集約していったことである。作業活動を通して、「文化」が外在的なものから次第に内在的な、自分自身の問題として捉えられるようになっていったのではないだろうか。

4) 上記のこととも関係するが、最終的には「目に見えない文化」についての議論が他を圧倒した。そもそもこの項目をたてるかどうかについても議論はあったのだが、自分たちが拾い上げた他の全項目にこの部分は絶えず関わるし、また自分たちが日本で生活していく上でもっとも興味をそそられ、また同時に困難を覚えるのもこの「目に見えない文化」であるという強い主張があったため、他の項目とは位相を異にするが、あえてまとめた。

5) その他のユニークな指摘を断片的ではあるが、以下に掲げる。

- ・日本人は人の感情を尊重する。だからかえって感情を表現しないことがあるが、誤解を招くことも多い。
- ・いつも相手をほめるので、本音がつかめない。
- ・「目に見えない文化」は教えられるより、自分で感じたほうがいい（けれどもこの意見については目に見えないのだから、最初からないも同然で感じるかどうかともわからないという指摘もあった）。
- ・同じ場にいる人間関係は本当に粘っこいと感じる。
- ・日本人は集団的凝集力が強いが、日本の狭い土地や資源の乏しさを思うと、そうならざるをえなかったという風に考えることができる。
- ・日本人はすぐ謝るが、本当は行動で責任を負うべきではないか。

5. まとめ

留学生の目から見たら日本の文化はどう見えるのかというのがそもそもの出発点であった。しかも五週間費やしたとはいえ、たまたま出会った三十人ばかりの留学生との一回きりの共同作業でどこまで明らかになるかという不安はあった。

結果は上記の通り、さまざまな問題点を孕んでいる。しかしながら、この試みで得られた収穫もあった。それは何かというと、文化を捉えるということはどういうことかということがいくらかはつきりした点である。何だ、そんなことかと思われるかもしれないが、外国人に日本文化を教えるというと今だにわびやさびの文化を想定する一般的風潮や、よくても日本の政治構造や社会、歴史などについて知識を供給するだけなどという発想は根強くある。

けれども日本に留学してくる留学生の多くは理工系などの学位取得を目的としている。彼らの現実感覚は、もちろんそうした奥ゆかしい伝統文化や、日本人学生なら高校卒業までに学習している事柄について、まったく興味や知的好奇心がないというわけではないが、より切実なものがあるのではないかということを常に感じていた。

彼らにとって、まず第一に知らなければいけない日本文化とは何か。それがこの授業で明らかにしたい事柄であった。結果は、まず第一に、留学生の滞在時間や興味に従って「文化」が次第に彼らの目線に立ち現れてくるということであった。そこで記述された「文化」は必ずしも外在的に捉えられるものではなく、また記述の一貫性も乏しく、立ち現れる順番についてもさらに量的・質的な把握が必要ではあるが、留学生の捉える一つの「文化」イメージにはちがいない。

第二には、留学生がもっとも興味を抱き、また同時に理解に困難を覚えるのは、日本文化のわかりにくい部分、すなわち「目に見えない文化」にあるという点である。日本人の曖昧さ、わかりにくさ、独特の形式主義、思わぬ寛容さ、ばか丁寧なところなど留学生には想像を絶する部分が今なお数多くあること、またこうした「目に見えない文化」が留学生の分類した「目に見える文化」のほとんど全領域を覆っているという指摘も重要である。

例えば、入学してすぐ訪れる研究室にも固有の「目に見えない文化」があり、それが目に見えないだけに留学生は人間関係のルール等に気づかないままに数か月を過ごしてしまう。気づいた時は手遅れになりがちであるという指摘もまた見過ごすことはできない。

また例えば、贈り物をその場で開けないのはなぜか。日本人学生はどうして教室で発言しないか。留学生との交友関係に継続性がないのはなぜか、気くばりとは何か。留学生はいつ、どのような状況で気くばりが足りないのかなどといった事柄について、自分たちはどこでどうやって学んだらいいのか、時間が解決するのかなどという問いかけもまた貴重である。

しかしながら日本人の側からすれば、それらは必ずしも説明のつかない事柄ではない。たまたまこれまで説明する必要がなかった類のことが多い。もちろん習慣になっていない事柄を意識化して説明するのはそれほど簡単ではないが、留学生が知りたいと思っているのはまさにその説明なのだということが、今回の試みから明らかになったと筆者は考える。

子供たちには口うるさいほど礼儀や挨拶の重要性を説く同じ日本人が無礼講という習慣を今なお有していること、また飲酒歓談の翌朝にはまるで赤の他人のようにすまして通りすぎるのはなぜかという彼らの問いは『菊と刀』以来の問いでもある。^(注9)

筆者が到達した結論は、このような日本人のふるまいの心的根拠、簡単に言うなら私たちは何を思い、何を感じてそのようにふるまうかということを知りやすく自分自身の言葉で相手に説明することなのではないかということだ。

例えば上の例で言うなら、あまりにはめを外して照れくさい、また距離を縮めすぎて「しまった」と思うなどの日本人の受けとめ方などは、十分説明可能な事柄である。もちろん親しくなりすぎるのがなぜいけないのか、日本人は自己防衛が強いのではないかという更なる反論も十分予想できる。またどの議論も日本人全部に適用できることではないことや、絶対的な正当性を持っているわけで

もないことなどを確認しながら、「文化」や「ものの考え方」について双方が議論できるということ、それが彼らの求めていることなのではないかと考えた次第である。

文化を発信し、文化についてともに語るということが真に求められている領域、それが「日本事情」なのではないだろうか。

(注)

1. 近年、学習者主体の教授法がさまざまな分野で提唱されている。語学教育はもとより、「日本事情」でもさまざまな手法が紹介されている。(細川英雄『実践日本事情入門』1994 大修館書店) 本稿での手法もまた学習者自身に考えさせ、発話させ、調べさせるなどといった手法を多くとっているが、全体としては折衷型で教師主導の部分も少なからずある。特に講義の部分はその傾向が強い。
2. Carter, Jによる「文化の島」(The Island Model of Intercultural Communication) のアイデアは 八代京子ほかによる『異文化トレーニング』(1998 三修社) を参考にした。「文化」を説明する際、極めてわかりやすいと留学生から指摘を受けている。また、本稿での教授法の多くは上記『異文化トレーニング』にヒントを得たものである。
3. 八代京子ほか『異文化トレーニング』(1998 三修社) p.19
4. 同上 p.25
5. 同上 p.33のほか、コンドン『異文化コミュニケーション』(1980サイマル出版会) p.87を参照した。
6. 価値観、文化相対主義などに関する文献は膨大で、日本事情担当者としてどこまで踏み込むべきか迷いがあり、以下の図書を参考にするとどめた。
竹内 実ほか『異文化理解のストラテジー』(1995 大修館書店)
青木 保『日本文化論の変容』(1990 中央公論社)
古田 暁『異文化コミュニケーションキーワード』(1990 有斐閣双書)
細川英雄『日本語教育は何をめざすか』(2002年 明石書店) Ⅲ「言語習得における〈文化〉の意味」
7. ステレオタイプの扱いについては以下の文献を参考にした。
河野理恵「ステレオタイプの強固さー『日本事情』教育の現場からー」21世紀の『日本事情』第3号(2001 くろしお出版)
Steven A.Beebe『Interpersonal Communication』(1996 Allyn and Bacon, Boston)
8. 留学生や外国人が日本文化をどう捉えているかという点については以下の文献が参考になった。
小川貴士「日本語学習者の日本文化把握の変化と日本事情教育への試論」21世紀の『日本事情』第3号(2001 くろしお出版)
綾部義憲『日本語教育学入門』(1991 創拓社) 第4章「日本語教室風土と人間関係」
9. ルース・ベネディクト『菊と刀』(1948初版 1997社会思想社) p.5
ルース・ベネディクトは日本人の特性についての記述では「しかしまた」と補足しなければならないことが多すぎると以下のように記している。ルース・ベネディクトは下記のような例を一ページに及び列記し、日本文化の特異性を指摘することから著述を開始している。

日本の閉ざされた門戸が開放されて以来七十五年の間に日本人について書かれた記述には、世界のどの国民についてもかつて用いられたことのないほど奇怪至極な「しかしまた」の連発が見られる。まじめな観察者が日本人以外の他の国民について書く時、そしてその国民が類例のないくらい礼儀正しい国民であるという時、「しかしまた彼らは不遜で尊大である」とつけ加えることはめったにない。